子ども時代と私(7)

私の中学生時代

――戦時中の三年間(1)――

湯沢　雍彦

変った入学試験

のんびり過した小学生時代から一転して、私の中学時代は、すべてのものが戦争の影と色濃く結びつき、重苦しくてやりきれない情景の中にあった。昭和十八（一九四三）年から二十年までの太平洋戦争末期が私の旧制中学前半の時期で、年齢的にも今の（新制）中学三年間に相当するので、この時期のことを少し振り返ってみることにしよう。

昭和十八年度は、入学試験からして変っていた。どの程度一般的なものだったかは今もって不明だが、私が受けた東京府立第六中学校（以下「六中」

と略称、現在の東京都立新宿高等学校）は、その前年から筆記試験を全廃し、内申書を参考にしながら、面接と体力検定で合否をきめていた。ただし、面接といっても人物をみるといったものではなく、A室では国語の読み方と解釈、B室では算数、C室では生物標本の名前を言わせるといったふうに、学科別に六室も回らなくてはならず、緊張した姿勢で即答を迫られるのであるから大変だった。体力は、短距離走のほか鉄棒の懸垂があった。懸垂は三回以内では落第だという噂が流れていたので、私は気を張って五回はこなした。「できるだけ頑張りを示さなくては駄目だぞ」と小学校の先生に言われていたので、身体が上らなくなった後もいつまでも鉄棒にしがみついていた。呆れた試験官に「いいからもう降りろ」と言われたのを今でもよく憶えている。

東京ではその数年前から「学区制」という制度が始まり、私が住んでいた渋谷区は、四谷・淀橋・中野・杉並などの区とともに一つの学区になっていて、たとえば日比谷にある天下の名門・府立一中などは受験できなかった。もっともこの枠は公立校だけのもので、私立校はどこを受けても良かったのだが、当時の私立は人気がなく、公立を落ちた者だけが通う所だった。うちの学区の男子校では府立の四中と六中とが抜きん出て評判が高く、自信ある者がここを目指した。私は先生の指示と、歩いて通えるという理由から六中を選び、何とか合格できたのだった。

訓練の毎日

入ってみてから分かったことだが、当時の六中は

皇国主義と軍国調が非常に強い所だった。一般市民に知らされていないことだったが、前年六月のミッドウェー海戦での敗北以来、日本陸海軍の衰退は始まっており、中学生への軍事訓練はきびしさを増していたから全国的な傾向だったろうが、六中はことさらそれを鼓吹し、中退して海軍兵学校や陸軍幼年学校へ進む者がいかに多いかを自慢にしているところがあった。

門から入るとすぐ左手に天皇の御製の額がかかり、軍隊式の挙手の礼をして校内に入る。それにふさわしくなるようにと、入学するとすぐにゲートルが配られた。ゲートルというのはカーキ色の布脚絆のようなものだが、元来ズボンのスソを脚に密着させるために巻きつけるものだ。ところが、合格しても従来の制服を買うことができなかった。町中探しても、もう長ズボンなど売っている店はないのである。兄やイトコを先輩にもつものは、そのお古を貰って格好をつけていたが、私のように長男で適当なイトコもいない者は小学校の半ズボン姿のままで登校するほかない。素足の上に巻いたゲートルは、どんなに上手にしてもたるんでずり落ちてきた。するとたちまち教官の怒声がとび、ふるえながら何度も巻直しをするのだった。思えば狂気の時代だった。

毎朝の朝礼で黙とうする際の姿勢も、毅然とした態度が要求された。少しでも動こうものならたちまち前へ呼び出され、理由が説明できない者には往復ビンタが飛んだ。ずっとのち私は、平成の初めにある女子高校の校長を兼任したことがあるが、朝礼の際の集まり方の悪さ、姿勢の悪さ、私語の多さには一驚した。自分が生徒だった昔を想うと、とても同一民族とは思えないほどひどかったからである。

一年先輩の作家・加賀乙彦（本名・小木貞孝）氏は、『帰らざる夏』の中で、次のように描写してい

る。

「中学校の隣が新宿御苑で朝礼の時宮城遙拝に続いて御苑に最敬礼をする習わしであった。正面、国旗掲揚塔の隣に鐘楼があり、《興国の鐘》と称する鐘が吊ってあった。これは軍艦三笠の時鐘をもらい受けたので特別な時、紀元節とか天長節とかいう祝日に鳴らしたけれども、ふだんは《副鐘》という模造の鐘を鳴らした。鐘の鳴っている間、全校生徒は手を前に組み足を開き瞑目して黙禱するのであった」。

数か月たってようやく学校から支給されたスフのよれよれの制服は、カーキ色で従来の紺サージよりはよほど見劣りがした。これは前からの伝統のようだったが、ズボンの横側にポケットの部分がなかった。寒い時でもポケットに手を入れさせないためで、しかも手袋の着用も禁じられていた。寒稽古と称して始業前の剣道に集まる時は、両手をこすりながら登校するほかなかった。

きびしいスパルタ訓練の空気は教室の中にもみなぎり、宿題を忘れてくるなどということは考えられもしなかった（即退学がほのめかされる）。音楽の時間でさえ英語の授業の延長の感があり、年老いてのんびりした先生が受け持つ図画と工作の時間だけが、わずかな息抜きになった。

夏になっても次から次へと、付属農園の草取り、多摩川原の護岸工事、初級グライダーの訓練などが続いた。

書棚の片隅から出てきた当時の日誌には、農場作業のようすが細かく書かれている。

「十六日、晴、烏山農場デ施肥。

作業……二人一組トナッテ溝ソバノ肥料溜カラ

池ノソバノ畑ニ樋ヲカツキデ持ッテ行キ、畑ニ十分肥料ヲカケル。遠イ所カラダンダン近クノ所ヲヤル、道ニ注意シテ行キ帰リガカチ合ハナイ様ニスル。

感想……施肥ハ本当ニ疲レル。家ニ帰ッテ肩ガ痛カッタ。オ百姓サンノ本当ノ苦労ガ分ル様ナ気ガシタ。

観察……小松菜トあぶら菜トガ同ジ種デアルコトヲ初メテ知ッタ。全部食ベラレル。花ハ黄色デ種子カラハなたね油ヲ採ル。葉ハ基ノ部分ガイハユル十字架形デアル。芯ヲ囲ンデイテ互生シ、上部ト下部トノ形ハ異ナッテキル」。

体育の時間は、神宮外苑を一周してくるショートマラソンが多かった。学校に戻ると到着順に並ぶのだが、最終者が帰着すると番号をかけて半分に分れ、校庭の左右端に立ち、後半の者は前半の者を背負って校庭を運ばなければならなかった。いつも遅くて小柄な私には、これは奴隷状態の苦しみであった。

夜間の行軍も何回かあり、甲州街道をひたすら西へ歩き、一時間余り行った所で引返すのである。何しろ朝からの授業のあとなので、単純な歩行はしばしば眠気におそわれた。歩きながらいつのまにか眠ってしまうのだが、両脇の友やうしろの友に押されながら歩いている。人間は眠りながらでも歩けるものだ、と我ながら感心した。

その訓練の成果をためすつもりか、七月終りには那須高原で五日間におよぶ本物の兵舎を使う廠営が

実施された。テントでの甘いキャンプなどではない。十二歳にして兵隊に近い訓練に連れ出されたのである。小さな肩に本物の重い小銃がくいこみ、雨中を何時間も行軍した苦しみは、今でも時々夢に見るくらいである。

おまけに、不潔な兵舎での食事は、コーリャンにモロコシの雑炊といったひどいもので、半分近い生徒が下痢を起して倒れた。しかし、医者も救急車もなく、家からの迎えなど望めるものではなかったから、皆よろめくようにして自力で帰宅したのだった。

その後は半月近くの夏休みが与えられたが、私はその貴重な休暇期間のほとんどを自宅で寝て過ごさねばならなかった。私は小学校では二日休んだだけの精勤賞であり、職場に出てからも病欠したことはほとんどない。こんなにも長く病床に臥したことは前にも後にもないという大病だった。卒業後二十年以上たったときのクラス会で、同行していた先生の一人が「大きな声では言えないが、あれは本物の赤痢だったんだよ。よく皆が死ななかったものだ」と語って我々を驚かした。

空襲の中で

この秋十月二十一日の雨の中、明治神宮外苑競技場で、大学生・高専生の学徒出陣壮行会が行われた。ところがこの有名な史実を私は戦後まで知らなかった。中学一年生はラジオも聞かず新聞もよく見てなかったのだろう。しかし、翌十九年の春には、我々も同じ競技場のスタンドに立って、「御民われ、生けるしるしあり天地（アメツチ）の、栄ゆるときに会えらく思えば」と合唱したことははっきり

覚えている。万葉人の心は当時の我々にぴったりだと思ったからこそ忘れないのであろう。

昭和二十年五月二十五日、新宿、渋谷、豊島などの山の手一帯が大空襲を受けた。防空壕にひそんでいた私が時々顔を出してみると、大雨の時のような音が聞こえ、閃光を引いた焼夷弾が幾つも斜めに降ってきた。だがそれは山の手線の土手の内側に落ちていくのであった。警報解除のあと顔を出してみると、土手の外側にあった我家は焼け残っていた。夜明けになるとそばの大通りを焼け出された人の波が明治神宮の方へ向っていた。その人々は口々に「焼けて良かったよ」「これでサッパリしたな」と言い合いながら歩いているのである。「何てことだ」と奇妙な思いで聞いたことも忘れられない。焼け出された親類が三組もころがりこんできて、五人暮らしの我家は十五人もの大世帯にふくれ上った。これで山の手線も中央線も動かなくなったので、二、三日は代々木—五反田間の線路を歩いて動員されていた工場へ通った。復旧して電車に乗った後も、「あっ、まだあった」「今日も残っている」と車内の窓から見える自宅の姿を毎日確かめたものである。

五回に及んだ大空襲で東京市の大半が焼野原となったように思えたが（後の計算によると五十一パーセントだったそうだが）、私についていえば、住宅も学校も工場も焼かれずにすんだ。だから疎開しないですんだのである。何かの運がついていたとしかいいようがない。

（郡山女子大学）